

第十三回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

小林 道夫 著『デカルト哲学とその射程』

(2000年5月30日 弘文堂 刊)

小林 道夫 こばやし みちお 昭和20年(1945)生まれ。京都府出身。専攻は西洋近世哲学・科学哲学。京都大学文学部哲学科卒業。同大学大学院文学研究科博士課程(哲学専攻)単位取得退学。フランスに留学、パリ・ソルボンヌ大学博士課程修了。大阪市立大学文学部教授(受賞時)。現在は京都大学大学院文学研究科教授。著作は、“La philosophie naturelle de Descartes”(邦訳『デカルトの自然哲学』)、『デカルト哲学の体系—自然学・形而上学・道徳論—』、『科学哲学』、共編訳に、デカルト『哲学の原理』、他がある。

受賞のことば

このたび、思いもかけず、私の著書『デカルト哲学とその射程』で「和辻哲郎文化賞」を頂くことになり、大変有り難く思っております。

デカルトの哲学は長らく近代哲学の祖と評価されてきましたが、最近には逆に様々な批判や超克の対象となっております。私はしかし、ずっと、その思想の比類ない規模の大きさ、とりわけ諸科学を自ら構築しながら人間存在の諸相を究明するという在り方に強く引き付けられ研究を続けてまいりました。また、その哲学は、科学的世界像と心や道徳の関係の考察が極めて重要な現代の思想状況の中で、むしろ大きな意義をもつと考えてまいりました。今回、そうした私の研究成果と考えをまとめた著書が評価され、近代日本の代表的思想家和辻哲郎の名を冠する賞を賜りますことは、このうえない喜びであり何よりの励みであります。これを機にさらに研鑽を重ね新たな仕事に取り組みたいと考えております。

《選考委員評》

近代哲学と科学の原点を問う

湯浅 泰雄

デカルトが近代哲学の開祖とも言うべき人であることは誰でも知っているだろうが、彼の思想が近現代の学問、特に科学の発展に対してどのような展望を開いたかという点については、これまであまり十分に検討されてこなかったように思う。近代科学は数学の娘であることはよく言われることであるが、自然の認識に当って数学が基本的な役割を果たすことを主張し、これを実行に移した最初の哲学者はデカルトであった。小林道夫氏のこの著作は、「はしがき」に記された氏の言葉を借りれば、「諸科学を提示しながら人間存在の在り方を追求するという、哲学本来の展開を大規模に示すもの」である。現代では、哲学の研究も細分化が進み、諸科学との関わりを失いがちになっている。小林氏は、形而上学と道徳論を軸にして諸科学の統合的關係を考えるデカルトの思想から、現代は学ぶところが多いと言う。科学が思想を失って独走し倫理のゆくえが混迷の状況におちいりつつある今日の状況を顧みると、この著作は私たちに多くの有益な道しるべを与えてくれる。

この本では、ガリレイ、ニュートンからマックスウェルらをへて現代のアインシュタインに至るまで、科学史の発展において、デカルトが切りひらいた展望の射程がよく明らかにされている。また、科学哲学や論理学の発展についても明快な解明がのべられている。今回の選考に当っては、三人の委員の意見は全く一致し、異議なく決定した次第である。

坂部 恵

今回の受賞者小林道夫氏は、フランス古典哲学研究の正統を継ぐパリ・ソルボンヌ大学でデカルトについての博士論文によって学位を取得し、その後ながら記号論理学・科学哲学研究の第一人者であるジュール・ヴーユマンのもとでコレージュ・ド・フランスの助手をつとめた。近來は、フランスをはじめヨーロッパ各地でデカルトとその関連の学会で活躍し、

また仏文の著書『デカルトの自然哲学』をはじめ多くの欧文論文を発表して、デカルト研究者として国際的にひろく知られている。わたくしのような一世代上の者から見ると、小林氏を代表格とするわが国の中堅研究者の国際舞台での闊達で肩肘張らない活躍ぶりは、まことにうらやましくまた頼もしくおもわれるのである。

今回の受賞作『デカルト哲学とその射程』は、この小林氏が長年のデカルト研究の実績をふまえ、科学史・科学哲学についての該博な知識を生かして、あらためてデカルトの哲学が、近世初頭近代科学の誕生の時点における独創的で徹底した思索のゆえに、今なお生きてはたらく遠大な「射程」をもち、現代哲学の混迷の情況に一筋の導きの光を投げかけるゆえんをあきらかにしたものである。自然学から形而上学、心の哲学・人間論にいたるデカルトの哲学全般にわたって、緻密な文献的考証をふまえた検討が加えられるが、たとえば、独自の真理観の上に立つデカルトの空間論・運動論にアインシュタインの相対性原理に通うものがあるという指摘はスリリングであり（小林氏に一九世紀末のユニークな科学史・科学哲学者デュエムの主著の訳業があることを付言しておこう）、あるいはまた、現象学や分析哲学といった現代哲学の主要な諸潮流の一面性を鋭く衝く議論は、デカルトがなお生きてはたらくゆえんを如実に示して、いかにも重厚で説得力がある。

濱井 修

本書は、デカルト哲学に関する著者の体系的な理解に基づいて、彼の思想が単に近世哲学の出発点を意味するだけでなく、その自然学や形而上学、心の哲学において、今なお注目し値する広範な視野と射程をもつことを論証した力作である。

著者によれば、デカルトは確かにコギト（われ思う）を哲学の第一原理にして、そこから哲学体系を構築したが、それをもって彼を近代の意識中心の観念論哲学の祖とみなすのは誤りである。彼はその後の自然科学の発展を方向づけた数学や自然科学を構築しながらも、それらの科学の基礎と限界を明らかにすると共に、科学的知性によっては理解できない次元として、日常の知覚的生の世界を認め、これに独自の意味を与えた人物である。つまりデカルトの哲学は、独特の形而上学に立脚して、科学的知識の探究と日常的世界における実践との双方を極めようとしたものであり、カントや現代のフッサールに見られる観念論の立場を超える方向を示唆しており、すぐれて現代性を有するものである。

本書はこうした著者の主張を裏付けるべく、デカルトの哲学体系について周到かつ精細に論及したものだが、その核心を成すのが「永遠真理創造説」のテーゼである。それは、永遠の真理といえども神によって設定され、それ故偶然性をもつ、という形而上学であり、これによって彼は数学的真理をも普遍的懐疑の対象とする一方で、数学と自然法則との相即において物理的実在の世界を構想し、実在論に立つことができたと言う。

本書は一九八〇年代から九〇年代にかけて発表された論考から成る論文集だが、全体をデカルト哲学に関する著者独自の体系的な解釈が貫いており、学術的価値もさることながら、読む者に心地よい知的刺激を与えてくれる優れた作品である。